

新刊紹介

赤川 学著

『子どもが減って何が悪いか！』

清 水 忠 重

男性と女性が仕事と子育てを分かち合う社会が実現すれば、少子化は止まるという男女共同参画論者の見解に批判を加えたものである。簡単に整理して言えば、2つのレベルでこの見解に異論を唱えているといえる。

著者は統計データを使って、たとえ仕事と子育てを両立できるような環境を整えても、少子化は止まらないということを実証し、男女共同参画は少子化を食い止める手段とはなりえないと結論づける。これはいわば、掲げられた「目的」（少子化防止）に対する「手段」（男女共同参画論）の適合性を批判したものとってよい。著者は男性が家事の分担をしなくてもよいと言っているわけではない。男女共同参画と少子化とのあいだにはさしたる因果関係はないのだから、両者を結びつけて論じるべきではないというわけである。

もうひとつ、著者は男女共同参画の構想に関しても批判を加えている。なぜこの構想がだめなのか？それはこの構想が、男女が仕事と家事・育児を分担する「両立ライフ」や「育児をする男」という特定のライフスタイルのみを特権視しているからであり、男女のこれ以外のあり方やこれ以外の生き方の選択可能性を排除しているからである。「産む自由」だけを奨励してみたり、「育児をする男」だけを支援したりするのではなく、そうしてもよいし、しなくてもよい、してもしなくても、いかなる懲罰・報奨も加え（与え）られないような制度を設計すべきである。選択の自由がまず保障されねばならないというのが著

『子どもが減って何が悪いか!』

者の立場である。そして少子化問題に関しては、年金、医療、介護制度が破綻しそうだから子どもを増やせというような方向に論議を展開すべきではなく、少子高齢化を前提とし、少子高齢化によって生じる負担をどのように社会全体で公平に分担していくかを考えるほうが重要であるという。要するに、男女共同参画論の少子化対策としての適合性を批判すると同時に、この構想自体を著者の理念に照らして批判しているといえる。

理念(構想)のレベルでは、誰もが最優先する唯一の理念などないであろう。少子化、男女同権、年金、景気回復・・・など、身の回りのさまざまなトピックのなかで、各人がいったい何を最優先課題としてとりあげ、それにどのような角度から処方箋を与えようとしているのか。価値の「神々の争い」の中で、自分はいったいどの神(特定グループの利益)に奉仕しようとしているのか。こういった点に自覚をうながそうとするかのような本である。データ分析の面白さを堪能させられる好著でもある。

(ちくま新書、2004年、217頁、本体価格700円+税)